

し、現在の結果からみると、35年周期の存在は非常に確からしく、現象的には極地方の高気圧が35年周期で強くなったり、弱くなったりするために生ずるとみてよいように思われる。

なお、本研究に際し、資料の収集、計算については山下脩二氏、羽柴順子嬢のお手伝いをえ、図のトレースは常岡好枝夫人の手を煩わした。また、経費の一部は、文部省の「異常気象の総合的研究」に対する科学研究費の一部を使用した。これらの方々に厚く感謝の意を表したい。

文 献

- 1) 朝倉正：大気の週期，予報研究ノート，**6**，77—96，1955。

- 2) Hann, J: Handbuch der Klimatologie, p.361, 1908. (J. Engelhorn)
 3) Trautmann, E: Die Brücknersche Niederschlags Schwankungen über Europa, Veröff. Geophys. Inst, Univ. Leipzig, **7**, 297—337, 1936.
 4) 関口鯉吉：降水量週期的変化の研究法に就て，気象集誌，**36**，225—241，1917。
 5) 平野烈介：樹齡250余年の杉の巨木に現われたるブリックナーの週期，気象集誌，**39**，276。
 6) Conrad, V and L.W. Pollak: Methods in Climatology, p, 370, 1950. (Harvard University Press)
 7) Lorenz, E.N.: Seasonal and irregular variations of the northern hemisphere sea-level pressure profile, J. Met. **8**. 52—59, 1951.

理 事 会 だ よ り

<第7回(14期)常任理事会>

日 時：1月10日 15時～19時

場 所：気象庁第3会議室

出席者：神山，大田，桜庭，岸保，北岡，島山，根本，
小平，朝倉，藤田

報 告

1. 地物連合の昭和42年度文部省学術奨励審議会科学研究賞等分科会委員候補はつぎの2氏に投票を発送した。

水上 武(日本火山学会)

田村雄一(日本地球電磁気学会)

2. 講演企画(吉野代理，朝倉)

仙台におけるシンポジウムは「熱帯気象について」おこなう。司会者は山本義一，話題提供者：柳井迪雄，渡辺和雄，浅井富雄。

国際大気電気会議(島山理事)

国内組織委員は委員長 田村雄一，事務局長

石川晴治。以下22名で構成する。

この中に実行委員会を設ける。全体の会議のChairmanはコロニッチ，副のChairmanは田村雄一。

3. 地物研連(岸保理事)

(1) 気象分科会で国際会議出席者のリストをえらんだ。IUGG 総会，高層大気，数値予報など。

(2) W.M.O.の台風センターは東京にできることが望ましい。

- (3) GARP計画は第1次案を検討し，従来のような個別的な計画でなく，土佐沖近辺において下層2kmまでの熱および運動量輸送の観測をする。これが成功したら，マージナル沖の観測をする。

第2次案「土佐沖の観測」の成案ができたら，天気のにせて，会員に知らせる。

議 決

1. ICSUの寄附金について

荻原委員長に学会の意向を伝えたが，文書は出したいくない意向のようであった。再度，委員長と話し合いして必要なら寄附する。

2. 天気の投稿規定について

一部訂正のうえ，原案通りに決った。

3. 気象学会の運営について

北岡理事より，作業委員会がまとめた，改正意見，問題点を説明した。この件については，さらに全国理事会に提案し，地方理事および評議員の意見を聞く，この会議に出す原案は，北岡，朝倉理事が作成する。

4. 新入会員を承認した。

訂正 Vol. 14, No. 1, 8頁 右欄新入会員のうち，
2442 B 杉山清春 同上 〃
を削除する(2252と重複のため)